

# パルシステムグループの 組合員拡大支援を終えて

パルシステム福島・郡山拡大事務所 所長

かつくらすのり  
勝倉靖典



朝礼が終わると各自準備に入ります。

## 原発事故の発生以降、組合員の脱退が 相次ぎ深刻な状況に

**パルシステム福島**は、7月4～29日にかけての4週間、郡山センターにてパルシステムグループによる組合員加入の支援を受け入れました。

エリアでは原発事故の発生以降、自主的に避難する組合員が急増しました。4月から6月だけで500人が脱退、7月も夏休みを利用した一時避難で360人が利用を停止する連絡を受けました。組合員5,000人の当センターでは、決して少ない数ではありません。パルシステムが進める地域づくりの観点からも、深刻な状況になっていました。

支援に派遣された職員数は、事務局を含め延べ103人。同じパルシステム連合会の会員生協、連合会、子会社のほか、新潟県総合生協からも協力を受けました。職員は1週間ごとの交代制で、日曜日に郡山入りし金曜まで業務に従事します。

実は受け入れ前は「まだいろいろなことが流動的で、夏休みだけ福島を離れる人も多いであろうこの時期に、拡大支援活動を行なうのは少し早いのでは」と考えていました。組合員の皆さんからは、夏休みを利用した一時休止の連絡をすでに少なからずもらっていました。ということは、地域の皆さんも同様ということです。

郡山事務所の職員には、見知らぬ人を受け入れることへの不安もありました。ある職員は「本当に来るのですか」と毎日のように聞いてきます。なにしろメイト職員(拡大専門のパート職員)が11人の事務所に、事務局含め25人近くが入ってくるのです。職員の間には摩擦は生まれないか、業務に支障は生じないか——。不安でいっぱいでした。

## 不安要素を吹き飛ばした 混成のチームワーク

**業務の体制**は、メイト職員と支援職員の混成チームによる行動としました。メイト職員は本来、週4日で午後4時までの勤務のところ、支援職員と行動を同一にしなければならないことから、週5日とし勤務時間を1時間延長してもらいました。

結果的には、事務所全体のチームワークが高まり大成功でした。職員からも「楽しかった」「刺激になった」といった感想ばかりが聞こえてきました。なかには、最終日に泣き合ったり、いまでも支援に来た職員の名刺をお守り代わりにしている職員もいます。

全職員が同じ方向を向いた結果、当初の目標としていた625人を大きく上回る757人もの皆さんをパルシステム福島の組合員として迎え入れることができました。まさかこれだけの成果が残せるとは、想像していませんでしたし、パルシステムグループ全体のチームワークをあらためて感じることができました。今回の支援は、事業的な側面はもちろん、地域づくりや組織間の人事交流など、多くの成果を残したといえそうです。



出発前には円陣を組んで掛け声で気合を入れました。



7月29日、1カ月に及ぶ支援活動最終日の朝礼の様子。目標達成の報告に、全員が笑顔で拍手。